里見八犬傳

拾七編

巻四十一

へ13
709
92

明遠13
新709
巻92

曲亭馬琴著

八犬傳

東京名山閣版

明治三六年十月九日購求

第十七輯

八犬傳第九輯下帙下套之中後序

智ハ知也。人生れて耳目の及ぶ所物として知ざるハなし。知るといへども其理を極めず。是を辨ぜるハ知ざれば。智の要を為さず。格物致知ハ則学者の先務也雖然是を知る而已ハ。慧ある者ハ悟るハ由なく。才ある者ハ智を致すこと能ハず。故ハ智慧と云才智と云佛説ハ所云般若ハ智慧也。智と慧と真足ハ悟るべく致すべを才と云。智慧も亦大なる哉。蓋智と慧と相佐けて用を做す。譬ハ人の身ハ魂と魄と有るが如し。魂ハ則心神也。魄ハ則神系也。人の心の欲する所。魄の資助ハあるを動ー足を運ー。動静云為坐臥行止一も其如意なるべし。智慧と才幹と相佐けて善致すことあるも是理ーを知るべを而已。然るハ知ハ上智あり。邪智あり。上智ハ良善の事ハ用ひて毫も奸悪の事ハ移らず。進退必度ハ稱ふ。動くといへども跌

○東京遊戯堂蔵

ゝも。是を賢才睿智とゝふ才い智の乖る者也是を以難一き才ゝく智ゝたい。則下愚ゝり。又邪智い奸悪の事ゝ用ひて仁義の心ゝく。進むを知ゝく退くを知ゝ思ゝも。動くとゝい人ゝ害あり。奸民盗児の才あるハヨく是ゝり。或い又良知ゝ心正く博く学びゝく奇才あれども。命凶ゝく用られず且勢利ゝ附ゝも。富貴を羨まず。同好同志の友稀ゝれば。但ゝ聖賢を師とし友として隠居放言春日秋夜を長くとせば。常ゝ書を著して。くみづゝ其智を龍ゝ志ゝ者あり。元の四維賢中。清の李笠翁是ゝ庶と甘ゝ。是ゝの下唐山ゝく云稗官者流囲俗の云戯作者是ゝり。そゝ中ゝ彼大筆と陋筆あるハ猶白狐と野狐ゝゝ。桂も柴も一勝ゝ人見て並く狐と呼べども。白狐い野狐の野ゝ遊ばず。功徳無功徳殊ゝれば。然ゝを柱ゝ膠せる村学究九い玉と石とを擇ゝ或い那才と忌ゝ。或い彼名を娼む者。其書の出ると吟く毎ゝ遮ゝ眉をとゝ頻軍めて是ゝの漢かくの如く学向ゝり。何とく儒ゝなりて章句を誦し。子弟ゝ教て真の道を伝へざるや。只是意匠を費し紙筆を費し。ヨく梓束ゝ災しく。世を誣ひ俗を惑せる是憎むべし。厭ふべし。と嗟くも間これあり。是ゝの腐亂の偏見而已蓋博く学得ず。退く戯墨ゝ遊ぶ彼大筆ゝる作者い然らず。大凡経籍詞章の学びハ和漢の先哲。叮寧ゝ注疏して。学者を教道すゝるゝ世俗ゝ皆教を厭ふ。世用の空言を欺び或い又奇を好ゝ。人の好ゝを聴く欲ゝ。のゝく達者の戯墨ゝ遊べるゝ事を凡近ゝ取く。誼を勸懲ゝ発し。空言以塵俗の惑ひを覚ゝ者。水滸西遊三国演義平山冷燕両婚史傳の五奇書あり。文章巧致至奇至妙其深意を推考れば。則齊諧を鼻祖として反く三教の旨ゝ違ひず。釋氏の所謂善巧方便五百の阿羅漢二十五の菩薩れ功徳ゝ伯仲をとゝふとも過くるとべくず。されども水滸の如い彼土ゝる具眼の

者も。よく其深意を悟るゝ。況や此土の俗客婦幼ハ漢文俗語を一行も讀汐べゝあらざれば。通俗解詁の一書ありたハ其書舶來して久しくなるゆゑ。彼も其趣を覘ふ由なし。只俗客婦幼のこゝろざしをさく戲墨を事とせるゆゑ。名人達も。よく唐山の俗語を讀汐ゝ。師とするや否を知らず。五吾其冊子を一卷ぐも取く閲せざれば。但作者の用心ハ寧勸懲の二字ふあり。然るを淫姓を上日とせる者時好ふ媚時好ふ稱ふく。書肆の鄙を賑せるハ。吾羞ぢる所ゝ因く。昨の非を知るよりあり。寛政文化の間ふ五吾戲墨なる臭冊子てふ合卷物の画本ゆゑと恥ふ。ゆゑと思ふもるゝふあらざ。然れども近曽ハ年年ふ五吾編次ゆる合卷物の本ハ新編金瓶梅を除くの外一書も新作なるとなければ。小利を欲する似而非書肆ども。五吾舊作なる物の本を恣ふ再板して画を新くし。書名を更めるもあり。更めざるも皆新板と偽り記て看官を欺く作者と共に如ふ表ゆるゆゑ是ゆゑ既ふ去歳の冬も文化中吾舊作なる。賽八犬てふ繪冊子の画を更めて恣ふ飜刻して新板と偽り記ゆゑ。ゆゑ吾是を詰りく新板の二字を削らせふ。然るを其書肆今茲も亦懲りずふ文化三年丙寅の春出る吾舊作大師河原桂子話てふ画冊子を又恣ふ再板して本文の画を減し。端像二頁を附增て像賛をさへ書加え詞書をも增減して画ハ舊刻ふ由らず。事皆恣ふ改く是を新板と偽り記ゆゑ。告る者あるふより速ふ其偽を咎めて云云とゆへせかども素ふより利の為ふ理義を辨知る烏滸の癡漢なれば。只強情を事として亟ふ羨服せざるゆゑ。畢竟戲の冊子なれば。徒る僻事とせるゝとも久しく世ふ貼るべくもあらざ。三十五年前の舊作なれば今の婦幼ハ欺れて新板と思ふもあらむ。又吾舊作なる物の本を多く藏める壯佼達ハ必ずと知るべし。然るを一時の瞋怒ふ乗して彼烏滸人の已が自恣傍若無人を

理義も廉恥も辨知らぬまでねく懲さんハ大人氣なりと思ひ棄てのせぎれども実ハ是憎むべし。彼も此も吾虚名を衒ひ知らるゝ戯墨家くらべれば名歸をしも評て賣らゝ烏滸の僻事を見もせも表面のうるさきよ本傳既ハ末三巻六回ハ多ハ速ハ局を結びて四方の看官ハ彼杣木樵る爺の柄の朽を知せまく欲りも然やでも老眼衰眺して編述不如意ハ多くれば爰ハ戯墨の筆を絶べ鄭高ハ画しさとうまさもち工佐藤正持ハ武北の旅舎ゆく八犬士を画ハく贈り来せハ題まる歌

根ハひとつ葉ハ葉ハ葉ハ葉ハ露のあハれハ露のあハれハ

盧生ハ夢ハ五十年又吾戯墨ハ五十年只一炊の隙なりで嗚呼久しハ哉吾衰へなハ五日夢ハ思ハ寐の腹稿将ハ盡さまくも後序ハ代なる口状ハ老の諄言なるべしと。飽れやまもむ已なんぬ。

天保十一年陽月

蓑笠漁隱

本傳前板第九輯巻之自三十六至四十校閲逆漏補正抄録

○三十六の巻初丁右七行小説傳記記ハ奇の誤字なり當ハ傳奇ハ作べし同巻初丁左六行遺憾ハ遺ハ遺の誤字なり同巻二丁右八行南柯夢ハ夢ハ夢の誤字なり同巻卅四丁左一行金時金ハ公の誤字なり當ハ公時ハ作べし同巻卅四丁左三行徳用も堅削傷訓のけハけんのけなるべし同巻初丁左五行李逵逵ハ達の誤字なり

○三十七の巻初丁右九行左纏の箍頂箍ハ誤字なり同巻三丁左三行喊の聲喊の誤字なり同巻五丁右三行旌を連旌ハ連ハ建の誤字なり

○三十八の巻三丁右三行下聞下ハ作べし同巻六丁左九行北魏ハ秦主の誤字なり北魏ハ甚ハ甚の誤字なり

○三十九の巻十丁左八行二天士傷訓の誤字なり同巻十七丁右七行隣隣ハ憐の誤字なり同十九丁左初行麻衣夏衣の誤字なり

○四十九の巻八丁左十行老荘四個荘ハ壯の誤字なり同巻廿五丁左九行親兵衛ハ歸京ハ東の誤字なり

この他聊ハるハ畧も。又云三十六の巻初丁右の七行ハ見えるる毛鶴山ハ聲山なるべしと。

一知音ハ今ハ老眼衰眺校閲如意ハるべし。作書の稿本寫本刻本まで校訂の時無ハ婦幼ハ讀せて是を守くのミ誤寫誤刀と訂ハ由なし。今般も訛舛ハるべし。再校抄録終

南總里見八犬傳第九輯下帙下編之中下總目録

巻之四十壹

第百六十七回　奔馬逐北犬江籠暴雛禽
再戰場親兵衛會五知己

第百六十八回　衝突二陣靈豬奏再功
報答舊恩戍孝全前言

巻之四十貳

第百六十九回　拾出野坑親兵衛受賜
掃除風葉諸勇士立談

第百七十回　神藥施得敵兵再生
現八拔箭活水死將

巻之四十三

第百七十一回　操神變伏姫華猶子初陣
謁舊君信乃詳父祖忠義

巻之四十四

第百七十二回　定正水路行大兵
音音江中焼一船

第百七十三回　借數艘大角拄義武
建降旗豊俊愚定正

第百七十四回　萬里一水道節射小仇
八百八人毛野麈大敵

巻之四十五

第百七十五回 南彌六顯靈祐子禮儀失時時有爲

第百七十六回 禍福反覆三士同功追兵屢逼忠臣極主

右第百七十六回以上爲下帙下編中。以下爲下。共陸續刊行。當至結局大團圓云。

巻之四十六

第百七十七回 一顆智玉途徵一騎驕將四個保質反捉兩個保質

第百七十八回 有種雪恥復歸鄉黨、大水陸濟度魚鬼

巻之四十七

第百七十九回 照文歸東房總ヲ福東西和睦兩國開津

第百八十回 義成重賞功臣妻八女信隆還任舊城免罪過

巻之四十八

第百八十勝回 抓龍貽化石、大蟬脫八行反壁八行傳十世

回外剩筆 頭陀話說枕中四十八城稗史大成本傳二十七年

南總里見八犬傳第九輯下帙下編之中下總目録終

性美而名
亦艶冶是
佳人後身
愚山人
潤慈鳥手古内
美容
振照俱教二
弘經

梶原后平二
景純
長尾太郎
鳥景

非是穿命
之鼠輩
當爲知主
之狗堂
信天翁
二四的寄合
五郎
須々利壇五
郎
人物頭倡刀

沖の石を
内あり潮
紅みちて
たゝえるち
のち共夜の月
半閑人
三浦陸奥守
義同
三浦墓二郎
義武

臨難苟不
免尾礫場
片玉葱韮
中蕙蘭
蓑笠漁隱
河堀刀祢
かいとりとの
實男濱兵衛
石鋼

のくあまのやそちの
めくりは書つゝく
人手をせぬ所
ゑみのくさそひ
曲亭陳人
山鳩
やまと
里見次麿
實尭

里見八犬傳。一百八十一回。以多歲苦樂將盡稿。因而自贊曰。知吾者其唯八犬傳歟。不知吾者其唯八犬傳歟。傳傳可知可知。傳可癡可知。上傳以下十一言讀以音敗鼓亦藏草以做良醫。

辛丑孟春　七十五翁蓑笠又戲識

南總里見八犬傳第九輯卷之四十一

東都　曲亭主人編次

第百六十高

奔馬北ゐるを逐て犬江景茶雛人寓と籠ゐを

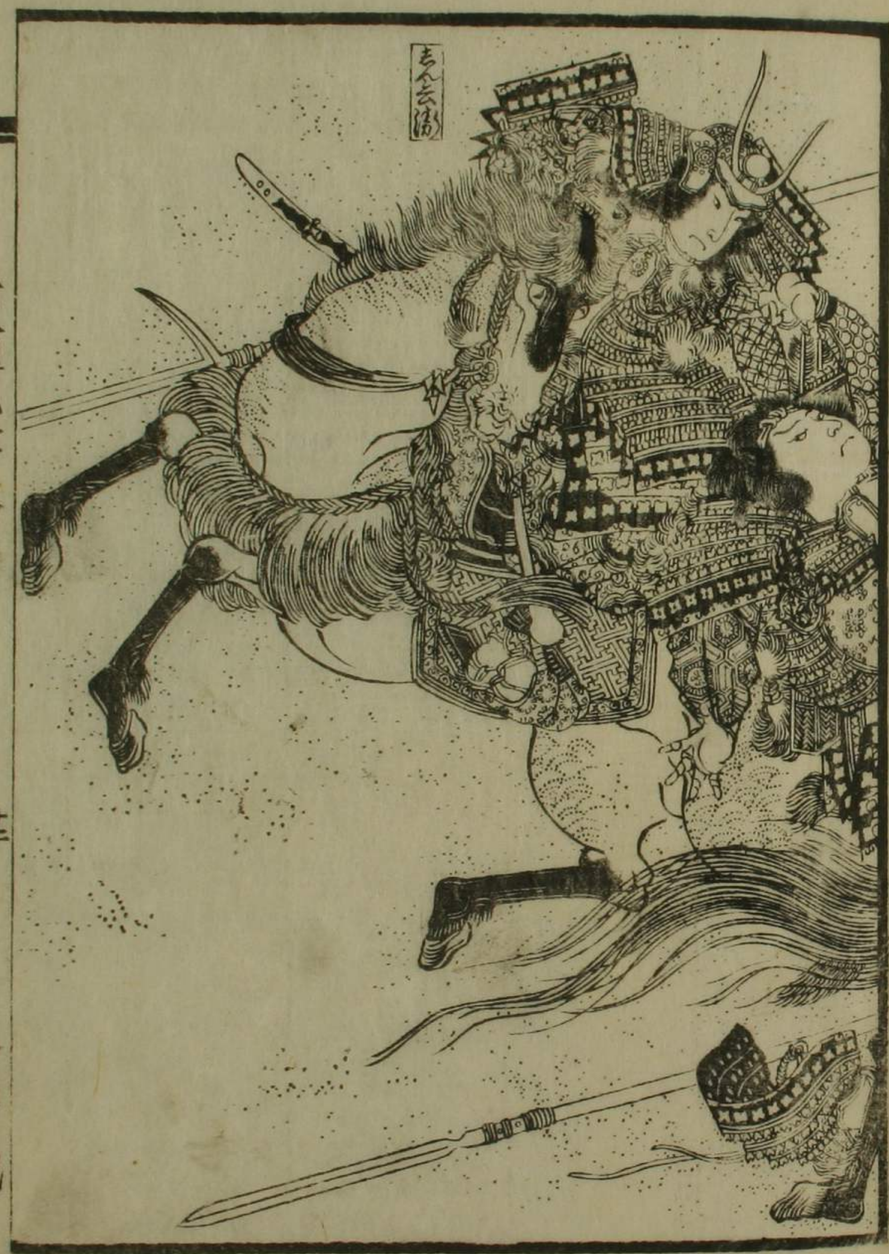
再戰場ゐ親兵衛五知已ゐ會を

再説犬江親兵衛ハ長尾景春の堅陣を一瞬間ゐ殺頽ちく。逃るを透さぞ迂ふ程ゐ政木大全姥雪代四郎直塚紀二六石亀次図太越卿三向水五十二太枝獨鈷素ゑ吉漕地喜勘太犬江の暇兵ゑ及伴當ゐ至るまで勝ゐ乘たる勢ひ劇ちく。皆後れ。そ相從ハ義通の先鋒の頭人振照俱教二弘經も刀痩ゐ撓ちく兵を找ゑ。奔馬ゐ鞭を鳴ゝけ。當下亦義通もみづから敵を迂ん。馬を其方へ乘向ゆハ辰相急ゐ走らせ來ゑ。馬ゐ乘ゐ閃と下立て。主の鑣ゐ推ゆりそいゑ。料ざりけ中途の劾敵閉戰難戈ゐ逮び折隊其名を知ゐる。政木孝嗣とや

らンが義旗の援けあり。是ぞ汝が忘れ幸ひなるかと又思ひ返すに。京師より犬江親兵衛が折りくさの地へかへるまく。然しも勍敵景春を伐敗走らせ。是十二分の御利運ありぬ。然るを飽ぎ思食く。漫に逃るを赶ひ。窮貓狗児を几破る。害るるくまや。量りくまり。疾岡山へ還らせ給へ。意に長尾景春が其隊の兵をヨヌくれそ。這路條へ出く来るハ岡山の御陣に戍兵寡なく。他風ぞ知りく。攻合まく欲せ去ぬ。いらむ那里ハ君の知り給ふ如く。國府臺と相對ひく涯る沿前所河を蓄る。要害の地なくいと。倘敵に据られるべき臺の城も後竟に守りかくやいらむ。とく還せ給へかし。と理り切く諫るに。義通ハ景春の敗れ走るを。赶も果さぬ中途より還んとの本意なるねど。豫父君の嚴命あるく。身の後見に隷られる家の老の諫言を。吭ざらんハさびしかるく。信乃現八等が聞戰の安危什麼と左に右に今も心にかれども。現岡山を喪ひ。後悔其甲斐なるべし。と思ひ復して默然なり。當下東六郎辰相ハ士卒を整歸陣を示しく。倶に義通に相俱しく。岡の陣営に返し入るに自家の刀瘡児ハ国就鳥を古内を首めく。士卒に到るまでも皆幸ひに窮所を外れく。死に至る者なくしに。辰相則雑兵數十名に相早せく。臺の城へと遣りける。

介程に犬江親兵衛ハ自家の士卒に先へくく。来る名馬青海波の蹄に信せて甚駑直に敵を赶ふと急るければ。既に迫に退に去れる。長尾景春の一軍ハ大郎為景殿しの五百個の士卒を領て。後陣に在り。今赶近つく犬江親兵衛の小勢なると見るくして。冷笑ひく毫も謀ぶ枯苦花と深に処に銃々の歩兵を両三名伏置く。敵を落さぬと構くり。退口の草伏とく赶来る敵の猛將勇士を。敵を捕るべき為なると。親兵衛又蚰く猜きれども。敵に臨て今ハに止るべき勢ひなるらぶ況や名馬青海波の疾と飛鳥に弥増れば。憶ぶに近くる隨に那草伏の歩兵ども枯苦花の裏とる。火蓋を鑽て撞と發せる。銃砲の寛び皆

錯く那身ふ中らぎ。怪ー蜚ぎ。以ある哉八犬士ハ各身を衛る靈玉あり。然おおの時親兵衛が胸邊より粲然ーる靈光両二道晃めに出く。那歩兵ゑの眼玦射ければ歩兵ゑハ憶ぎも。吐嗟とだろふ鋲砲を捨て驚に立ハ程ふ五十三太素ゑ吉胞弟兄ハ俱ふ長械を挾ーく走りそあふ來ふけるを。親兵衛馬上ふ見ーそ。登よ那奴ゑを饒ーゑせそとゆふより早く五十二太素ゑ吉あろるをと長械を合直ーんくーち向ひ悍く勇る勢ひふ中るべくもあらぎれ逃んとせーを走らせぎ胞弟兄長械振閃めーく。件の三個の敵兵を矢場ふ毆ふ仆ーけ。其間ふ犬江親兵衛ハ馬を敵中へ乘入れく。群立ち敵の衆兵を。鎗のそ引く薙仆を一騎の奮ふ男四下と拂ふく。縱横自尊ふ駈破れが長尾の士卒驚に怕れく。憶ぎも逃走ぎ。長尾為景怒りふ堪ぎ士卒を罵ろ聲も烈ーく。獨馬上ふ親兵衛と鎗を合せく。一上二下とゆを畫に。少年ゑれども猶勇あく。堅を摧く本事あり。武藝足らざるふあーねども。然とく犬江ふ敵ー沼んや。鎗法漸々ふ衰へく。既ふ危く見えーりぎ。為景の老當黒近ヨ日十名許返ー來ふ主を援けて。親兵衛と毆ん。と競ふ程ーもあーせぎ。政木孝嗣姥雪與保。五十三太ゑが隊の乾児の毎齊一吆と走り來ふ。推隔相拄えく。六七人ふ痍を負せ殘る二人を五十三太ゑ。械の冴ゆぞ斃ーけ。當下犬江親兵衛ハ既ふ疲れー為景を刺さぎ一鎗ふ殺をゑを。素より仁慈の本性ゑれが猶一雲妻時疲労せく。怯むゑふと横ふ拂へ為景ハ鎗を持ゑふ馬より撞と薙落されく。俯平張りふ蠢ゑく。身を起さんと掙扎を親兵衛透さぎ馬上より。鎗を直ー幹當りく。為景ハ面を赤ふーふ。耶と聲ゑけく幾番狡反起まく。欲ーるふ辟言が千曳の石をそ。壓ふ措ーぎ。喘も出ぎるふけり。浩処ふ直塚紀二六ゑ。漕地喜勘太以下ゑ。伴當及五個の野兵と俱ふ走りくゑふ來ふければ。親兵衛ヤヤ。野兵を喚て頤



親兵衛
馬上ヨリ
為景を
摘ふせ

りく虜児を指示せば賜兵多い唯々と応も果ぜ下累ゆく為景ふ敬ゐく索を
揖ふけ然び長尾の士卒们い或い斃され或い落亡く四下ふ敵のあらびゆりーゑ親兵
衛い孝嗣次囲太鄭二ゑ志もあるで剰五十三太素ゑ吉其毎さへ義通君ふ従
ひまりく這戰場ふ在るを見て且訝り且欺びく脚て馬より下ゑ程ふ振照倶
教二弘經い東六郎辰相の指揮ふ依りて一千有餘の隊の兵と新参の野武士二四
的寄舎五郎須々利壇五郎並ふ其従兵六十餘名と相共ふ又親兵衛と相援
んとく今稍ゐふ来ければ親兵衛い孝嗣们ふ面談を先図ゆく隨即倶教二
们を迎へ労ゆく却剛才ゑの地方ゆく敵の殿の隊長を擒ふ做ゆー事の顛末を
箇様々々と告知せく又ゆゆう我隊より人の噂ふ知りゆ長尾景春の家子ふ
太郎為景と喚做をゆり少年ゑれども胆勇ゆく武藝十二分の本事ゆりとゆへり
意ふふ今我生拘りくる勇少年い必是為景ゆくむ和殿い他を牽せ遣りそゆの

義を呼え上のゆれ我い舊友政木大全们ふ料ゆも再會の情義を盤ーて伴ふく
御陣へまゆくん景春遠く逃亡くれば這里ふ多兵を益へ隊の兵ゑ皆倶ー玉
ひひとゆふ弘經敬服ーて且羞く答るゆ卑職ゆい和殿と昨今を對面い今を
始るれゆも其武畧勇敢の今古ふ獨歩ゆりーふ違ざりけ和殿のゆの
犬塚犬飼倶ふ是豪傑の士ゆく萬人の敵とゆうべ其儔ゆゆ卑職ゆい
手管の細人驥附の功を欲ゆるりのゆう響の鬨戰ふ散ゆー隊の兵亟ふ聚合ざり
ゆゆ後の戰ひふゆるゆゆをゆりーい面るくてそゆの兵と勸解ゆゆ寄舎五壇五郎も亦共
侶ふゆら抗て遲参の罪をも謝ーふけ當下倶教二又ゆゆう今い當所ふ要ゆーと
ても卑職が預ゆまゆりく拘て来ふけ隊の兵を送ゆく倶ーくかのゆゆ上の御上日ふ
違ふよ仮ゆう景春愛子の生拘られをゆゆ怨ふ堪ぜーて途より返ーゆへ来ゆ
是も亦知るべゆゆ卑職い二三百個の雑兵を従へく其生口を牽せて退らんとの

美を饒したまへと。請ふを親兵衛曰く。否とよ。閑戰の勝負は隊伍の多少に依るものあらず。機に臨みて変に応じて。其進むと脱兎の如く。其退くと処女の似く。未戰に安危を知る者は必勝ぎとふべし。されども上の御意とあれば。推辭まつらんは最も畏し。命じべ隊伍五百を留めて。其餘は俱して退りぬべし。されば上の御意に悖らじ。と分るれば越度なるべし。と論さを俱教に強難て竟に其説に任せて。精兵五百名を拔出して是を親兵衛に遣與し。従せて。却孝嗣次圖太郎二五十人。素より吉们に名對面して。今日の義戰を叮寧に労ひ謝まそ。且親兵衛に教びを。評く。儘為景を受合まつり。隊の兵に牽せて隊伍齊整と馬。をそめて暴河原なる岡山を投て退りけり。亦程に犬江親兵衛は猶思ふ。あれば。兵二名を召よせて。事低々と吩咐れば。皆あるべく直走りに葛西の。くへを赴けける低く又親兵衛は喜勘太に吩咐て敵の二無きる草柵を。五六枚

命よせて。亟に主客の坐を儲く。然而孝嗣們を請じ坐らまつる。其身も坐して對面を登時親兵衛がの為に料らざりける。政木主石亀師弟向水弟兄恙もあるぞと愛く。就中評るは。政木主等三人の上にのみでもあるべきに。今茲四月某の日に和殿等三名は。結城なる左右川橋を渡りも果ぎ敵の連發ちに鐵砲に斃されて。推流されぬ。沈沈に狩猟れども知るよしなければ。我のみにて義兄弟等七人。都て最惜く。今に至るまで忘れる時なし。館も守り召て最恭に御諚あれば。然は又我們八人は結城よりかへるさに故あれて。穂北なる落鄙の宿所に居る程もなく。館より。大師父を。使を稲村へ召させ。ひそかに恩遇。孰も。殘るぞ。中の我仁は京師へ使を奉。七月の下旬より那地に在り。館の願せのまま。如く。撰向は最も畏し。朝廷より我們八人に。姓氏を賜りて。金碗宿禰と。称されし。低過分に。教びあれば。不測の憂ひなしとあらじ。管領政元主の計ひ。亦て副使に参りて。蛮崎十一

郎が身の暇を賜りて我身が還るとて餞されぎ伴當ども那姥雪代四郎史と蜑崎の若黨直塚紀二六と雙兵五名と若黨奴隷六七名倶に京師に淹留あるべし。前月廿四五日時候まぐ同じ憂に沈みて在りしに我西館の御盛德と諸神諸菩薩伏姫神の冥助に依りて虎妖對治の功とりく稍厄釋て主僕皆還るとぞ云ふ。路に愛馬走帆の病て客舍に斃れしが是もの故に又日を費して稍信濃路まで來かける程に我君不慮の軍旅の風聲漸々に具まて鎌倉の両管領諸將を連ね兵を合せて安房上総を攻畧せんとの事の趣を聞えしかば驚いて去向をいそぐに上毛より東に新関あり過ぬとを知るに只得間道を尋索めて今朝も武藏豊嶋の千住河まで來かける折鄙に稲村の城内に厩に數疋在せる元此名馬青海波の苛くも河をうち渉して這方へ來るに逢しかば訝しく思ひ付て便宜にあるべし躰て這馬にうち乘て千住河を渉る程に姥雪直塚雙兵若黨奴隷の每に或は馬の尾に携り或は連枷に身を浮して泅ぎて前面の岸に届る料らざりける小敵あり戰ひ勝て降參の折其姓名を詰て知る。即野武士の頭領なる其里に侍る寄舍五郎と壇五郎名乙原是當家に歸服の情願あり是によりて青海波の来歷も粗知る。

一隊を從へて馬の足搦に儘せて心とも為く御曹司の御危戰の折に騎着く勍敵長尾景春と芝拂ひて復這里に再戰の勝を為く和殿等五個の蒼頭識に再會の歎びあり我上は先かくの如し。和殿並に石亀師弟の再生は故ぞあらむいかに。と問く孝嗣次國大等は側聞せし向水枝獨鉆の隊の壯佼なるも又二四的須々利の兵每五百有餘個の軍兵なれば皆驍然と舌を巻く奇談に感嘆きらるる。姑且て孝嗣は親兵衛に向ひて適愛しき和君の高運妙用自然に稱ひ忠心義胆の致す所神佛の冥助なるべし。但感心といへば鳥滸がましく並く

敬服の外なし。就く我们三人の上へらへでもあるべ四月の時候倶ふ和君ふ従ふく。那日結城ふ届る時。和君の歩の又蝨ければ。一町おまり後れつ。左右川とり喝ふ喝る野水ふ架こる。把橋を渡らゆく程ふ誰とい知ぞ發出も幾十挺の鉄砲ふ撃るまこふけつと思ひ。のこといへば次圓太語を續て。身い水中ふ撃る隊墜されて。推流さまと。狭沈こ。狭我ゆもあっでゆえと。といへば鄭三咱竹も同容是より後のゆいも哥ふ具ふ説出ねとのひつく傷を見らへれば。五十三太含天點頭て。却小可弟兄い関宿ふ船果一時結城へ伴と饒されば。只得船を漕退けく。家路を投て還るのりら送憾さふ堪されば。家弟素多吉と商量さらく。和郎いらふ思ふやらン。量裏ふ犬江和子ふ値遇せよ。乾児们と共侶ふ水路を上總まで送るべ。素藤とらと對治せらく。戰場へ伴れぞ。僅ふ落人を搦捕く。賞禄ふ米を賜る。徒て犬江和子い友人三名と伴ふく。結城の法會ふ赴くと吟えくば我们又是を送りて。

水路を関宿まで送らく。法會の伴と饒されぞ勿論辛苦錢とく。今幾枚狭恵れ。と。銭財い咱竹もの本意ふあらぶ。俗罪雑の戰場菩薩の法會。其伴ゆも省れて。阿容々々とて。かるいるん。恥赫爽ーに事ゆく。乾児们ふ侮られん我国関宿より柴船の結城へ暢ふ小流あり。急流られども廣らぞ。其地々々の荘客ば用水ふ走ぬるのこふの故ふ巨舫い漕容ることゆ。幸ひりく今日我船い快船られぞ易くてんいで。結城へ赴ぞく。躯れて法會と見て退らんの説什麼と談ぞれば。いへば素多吉語と續く。小可是をうち听く。開る最要ある主張へ和子ふ知られて。叱らくとも。分説いいそうもあらん。然らば又蝨く遺復せとく。猛可ふ舵と食東ーく。又関宿へ漕戻を程ふ既ふーて日の暮れーくば只得那里ふ船と歇く。其夜の明るを俟ふ。といへば五十三太却听ゆ。偖而次の日の早天より。那枝流へ船と漕入れく。結城を投く沂るふ川幅のひと陜くて。流急ければ船萬まぞ或い左右の岸ふ繁

ア立る樹の枝ふ掩れて去向見えざる処あり。或流減く船余りく竿を使来曳
ル処あり其頭い素ゑ吉を岸ふ陟せく。船を曳せく溯るふ然るでも猶蔦ぬ折ゑ。
第兄水ふ下立く。船を肩擔ぎて幸くく。推のそ遣ると幾町ゑりけ。恁る辛苦ふ
時稜りく日長ル四月のかひもゑく。結城へ尚二三里もあべくんと思ふ比。日影い既ふ斜ふ
ゑり奴心連りふ焦燥ども。其頭い特ふ流険くて。せん術もゑル折ゑりこと見れば人の浮屍
骸一人ゑりぎ二人ゑ。船ふ歌くく流れもゑぎ。噫忌々。と呟ルく。竿のそ突流さ
ちく欲ちふ。細流ゑれい遣も反らぎ。只得又素ゑ吉い呟ルゑり端ふ下立て竿よりそ
其死骸と突流さちくせ。程ふ忽地一聲苦と叫ぶゑ。小可吟ゑく驚くゑく衣と
脱捨て下立く又其浮屍骸をよく見るふ果して是政木主と石亀屋の乾父
乾児ん評。くも亦痛ちル相識達三人ちで恁る横死ふ胸淀れてさもくとだ
くふ小可も亦ゑ傷よく。三個の屍骸を左右ゑく。皆船へ曳無せて見れば孰も身

體ふ銃瘡三五ケ所ゑり。ゑれども猶幸ふ面部胸腹ゑりゑ窮所ふ。只是膈ゑ
脚のみ然る故ゑ三人倶ふ死ぬくゑりて見ゑれども胸膈い温ゆく。推ゑ動脈ゑふ
似ゑ。原来ゑちぎ死絶ぎルゑ疾水を吐せちく。一個々々ふ舵へ推撰て。倒ゑて腹を
推ちふ。孰もまく水を吐きルゑれども氣息ゑ。登時小可素ゑ吉と商量を
ルゑ。あの人々い昨日関宿ゑく相別れちゑ犬江主ふ伴れて結城の法會ふ赴けば
んふ皆痰を負ゑく水ふ陷りぬい必是故ゑ。我意ふ。今日那里ふ不測の
禍鬼起るとゑて。聞諍ゑ及びけん倘果して今ゑんふ犬江主の安危心許ゑ。
然ばとて。這九死一生ゑ三人をゑち棄く。陸を走りく結城へくとも只其安危を知
るのみゑく。鄙語ふ云。喧嘩果ゑ。杖三味ふゑるかしぶ事ふ益ゑルのみゑで反て犬
江主ふ恨をられん。所詮船を漕戻して宿所へ還りて。あの人々を活さば結城の安
危も知れん。女々ゑくものと思んや。とゑく傍を見ゑれば素ゑ吉詞を受接て愚

る兄の弟間中準えれば艇く船を漕戻まを急流の降舫い其勢い剣を射似ぞ射
箭の如く又疾ければ其瞳昏を関宿まで戻り猶も力を勁せく通宵漕りく
程を其詰朝両国河原を宿所へ帰着れば政木主们二人の為を医師を
招き療治を請く膏薬を打せ湯剤を薦るを死も果ぎ活もせぎ。その比又小貝。
悄地を結城へ赴て和君達の安危を訪るを。那里の風聲隱れもあぞ。那一足寺の
悪住持徳用結城の家臣長城枕介惴利堅名衆司經穂根生野飛惟大素
頼们ら法會を乱妨の事且件の僧俗奸虐人们は皆八犬士を撃を懲されて活恥を
曝せ多又八犬士と、大庵主の反く結城殿を誉られて那里を退りぬ。
ぬくかの本を比。政木主石亀師弟はやう盛く痙可を赴くあら。撃れ腦の
筋縮りく起居不自由るければ並龍くのを在りとのを平二太又績て倦て
二伏の夏過く。秋八九月をりー時候安房とる来る商舶は八犬士達の上成

諮問ひを今いも八人をぐら。里見殿を仕まりて瀧田の城内を在り開ぐ中を犬江主は七
月の比使を奉りく京師へ赴ぬとのへまの時二個の客人達は舊瘡皆をとり
る愈くを脚自由を走行も生平を異るくるりゆりくれば咱ぞ弟兄折々薦ぬとぞ
あは安房へ赴く。里見殿を仕ぬ那里を犬士達の在るれば事成るべ。とのひくぐど政木主
も石亀叟も倶を云云と意衷を演て従ぬべもあ。ぞれを非如幾ぞ我家を歇船
ゆく在りとも開ぐ獻ぬをあらねども。素より富る我身るれば銭るく米る做活
折々は反く這個の客人達の盤纏を費ー米を買せて養る日もヨクるとのを
孝嗣咳て禁めく親兵衛を告るを。我们二名が薄命を且再生の事の顛
末は目今這弟兄が口状を具るるを然ば是ぞの趣をいくぐ和君を告ぐぞと思ひめ
かく頁果るまで瘍愈ざれば筆も把られぞ又七月の比より狩和君は京師へ使ーく。
安房を在ぞと吟えーば歸藩の便宜を待のをゆく。向水ぞ義侠の幇助を我

のこるゝぞ石亀殿さへ心ゆもあらぬ長逗留しく做さるもくありけるゆ今番里見家
危窮の軍役敵い則扇谷山内の両管領ゆく大軍水陸より攻伐まくさと
云檄文を市ゆ掲げく隠もあらぬ咱ゆ石亀殿もゆ墩馬ゆ
人ゆ問へども和君い京より還れりやいまゝ殿やと誰もゆ知らず絶てあるゆ本月の
五日ゆ至りく扇谷の間諜児の安房より来るあり原是向水の乾児なれば
五十三大隨即他を哄誘して両敵の必事を搦ゆ大江玉い京よりの帰ゆ還れ
ゆの他犬阪い軍師ゆく六犬士い防禦使ゆ寄隊い則箇様々々と水陸の隊配を
呼ゆ説示さるゆ囲府臺の寄隊の大将い山内顕定主と足利成氏主と両旗も
副将い山内憲房主と両隊の軍兵六萬餘騎実い四萬有餘なべ今朝ゆを
五十子の城より發向して亀蛭ゆ陣をとゆひしとも咱ゆ云の義を偽りて猛可ゆ主人
弟兄と石亀師弟を閑室ゆ聚合く密談あるゆ那大江い我恩人へゆるゆ

京師へ使して今番の大事ゆ遂ぜるゝぞ朽惜く思ふべらん我今那人ゆ成も代
やく里見殿の御為ゆ一臂の力を盡して那恩義ゆ報ふべし偖いへども扇谷
殿い是我舊君へ既ゆ恩怨地と易く雖言敵ゆ向て弓を引ゆ
紙を飛さんい我本意ゆ違ゆ囲府臺寄隊の大将顕定父子と成氏主
ゆ我亦ゆ恩ゆ義もゆ況や囲府臺の城ゆ里見義通君大将ゆ防禦
使犬塚犬飼ゆ城を出て寄隊の大軍を迎るとゆ然らば尤便宜の地ゆ
先ゆ那里へ赴て時分を料り変ゆ応じて里見を援けて寄隊を敗らんゆ
麻ゆと談られい石亀師弟向水弟兄悦び勇ゆ他議ゆ及ぶ主人い悄地ゆ乾児
義子ゆ御示しく集合るゆ僅ゆ半日許の程ゆ来會ゆる自家の壮佼六十餘
名ゆ及びけると告るゆ次囲大受續て却小可い越路の市人悍く勇る物部の八十
宇治河の瀬ゆ立もゆ少ゆ時ゆ角觝ゆ好て老ても侠氣耗ねゆ始い犬田大

川主ハ知られまゐらゝ歟びあり其後淫婦妖夫ハ誣られて身ハ罪をゝ負罪人ハ做
ひて牢獄ハ繫れゝハ鄭三ゞもゝ犬阪主の救ひを仰く罪を免れ歟びあり。
其後又両國河原ゆく御身ハ値遇ゝゆゝより政木主と共侶ハ館山の城攻ゆ又
結城の法會ゆ伴れる歟びあゝハ左右川橋ゆ必死の大厄向水ハ弟兄の資助ハ
再生の歟び四度ハ及べゝ安房へハ入ゆ御身ハ格另大田大川大阪主ゆ
告ざゝハ今政木主の云云と陳ゝ情由ゆ饒ゆ。と語ゆ
亦鄭三ゆ舒る臣誼と孝嗣ハ推禁めゝ又ハ犬江主ゆ我両敵の勝負ゆ覘
ひゝハ昨日まで闘戰互角の勢ゆあり這曉ハ至りて寄隊の三將戰車ゆ焼ゆ
敗績ゆと告る者あり。ハ長尾景春ハ那三將の隊ハ附ゆ今朝ゝゆ猛ハ
旗を建て岡山のゝへ赴くを我ゆ知りて思ゆ景春一箇の隊兵をゆ岡山の
ゆへ推寄ゆ那里の空虚を覘ひ知りゝ攻ゆ欲ゆゝん倘那壘を奪ひ

畢れば臺の城の大害ハ悄地ハ後ハ跟て彷ゝ機ハ臨ゝて轂ゆ破らゝゆと思ハ心を
我衆ハ告て悄地ハ引て來ハけるゝ豈討んや。義通君の一軍ハ中途ハ景春ハ相
逢ふゝ他兵を雜へゆ野戰あり里見の士卒勇るハ有ゝれど景春ゆ亦然る者ゆ
見ば風ゝ士卒を三隊ハ分て義通君の備在ゆ其隊をみづゝ轂ゆ乱ゝ闘戰
難義ハ見えゝば咱ゆ孤軍の壯佼們をりゝ景春を相拄えゝ力戰時を移せ
かども我隊兵ゝ俠客のゝゆ軍陣ハ熟ゝる者ゆ且戎衣も器械ゆ真物真剣
ゝゝ敗れば勝を合ゝと難ゝゝハ折ゝ和君の馳著ゆゝ一瞬間ハ景春を敗ゆ
走らゆゆゝゝ上ハ再戰の獲さへあゝハ我黨の及ば所雲と壤ゝハ異ゝゆ感
服至極ハ祝せば代四郎紀二六們野兵ハ伴當ゆへゝゝ寄舎五壇五と其
隊の兵ゆハ耳新ゝ心地ゝゆの人ハ和て這友あり寔ハゝゝゝとゝゝ者ゆゝゝ
當下犬江親兵衛ハ甲乙の會話をゝゝと果て且歟び答ゝゆ。命芽出ゝゝ和

とら殿等の再會。我のミ今で大阪大山。大川大田自餘の大士も欽び必等しかるべし。以ゐる哉政木主は是忠孝の俊傑。又石亀の義俠ゐる且鄭二ゞ其師ゐ孝順ゐ。又五十二太素ゐ士ゞ善ゐ與して任俠ゐる積善餘慶の天助虛しからぬ。或は縲紲の寃屈ゐ陷れらるゝ。白刃頭ゐ蒞むとゐへども。或は不測の敵の矢丸ゐ斃されて。急河ゐ陷ゐるとゐへども。其死を起し生ゐ回ゐ及びて。ひとゝゝ甲を救せ丙を援けむ。因あり縁あり同忠同義造化の默契妙ゐる哉政木生は曩ゐ我ゞ素藤對治の日ゐも戰功あり。只管奉仕を薦めゝども猶云云と意衷を演て從ふべくもあらざりゐ今日は又咱ゐ代りゐ御曹司の危ゐ野戰を援けまゐらせ。勍敵長尾景春を防ぎ禁め。掙ゐ実ゐ一人當千之矧又石亀師弟向水枝獨鉆弟兄ゞ其徒と共侶ゐ政木生ゐ從ふゐ當家の為ゐ忠戰い始あり終ある其舊縁を推きとゐへ。皆仕へぎとゐとゐへども。皆是里見の家臣ゐ同じゐの義を以ゐ上ゐ御曹司ゐ

両館義実義成を以ゐ。御感大々ゐ恩禄子孫ゐ偽ゐ日大宣定ゐ賀ゐべし賀ゐべしと連ゐ感嘆ゐる。浩処ゐ鄕ゐ大江親兵衛ゞ野兵三名ゐ吩咐ゐ敵の去向を見て來よとゐ遣しゐる其兵毎走りかゝる來ゐ。跪居て親兵衛ゐ告るやう。小可毎い命せられしゞ。敵得長尾景春ゞ敗れ走りし迹を尋ねて葛西の方へ赴ゐひしゐ景春は戰ひ敗れしゐ北走ると遥ゐ遠ゐ。やゝゐ旗を建て散ぜらる士卒の集るを待ゐ一乗時の程ゐ皆聚合ゐて其兵又三千有餘ゐ做りゐ有信一程ゐ其子為景の殘兵の數ゐ漏されゐるゞ幾名狡逃かゐ來て事信々と告しゐゞ景春聞ゐゐ驚ゐて且怒り且怨ゐ必堪ゞ隊長ゐる直江宁佐美梶原樋口等と遽しく召近つけて為景の曾様々々と告知せて且ゐやう我憤ゐ獨立の志ある故ゐ山内の隊ゐ附ゞ獨岡山の墨を襲ふて臺の城を拔き欲ゐし。計較風く齟齬ゐ。為景い初陣ゐる漫ゐ血氣の勇と負ゐ。そみづから殿ゐられしゞ那小猴子犬江と

らンが辱ふ値ふけめ。我子と敵ふ虜ふせられて。阿容々々として恁くのごあらべ。許我山内ふ失れん先や。今亦推寄せく犬江と殺して。義通を捕へて怨と復さふあらぐ。生く二ゝび還るべうぞ。さらくせよと。敦圍に暴く軍扇をのく。膝うち鳴らして。臂と張り眼を瞪ら。連りふ焦燥ふ威勢ふ。隊長毎ふ諫難て。猛可ふ下知ゝ。馬ふヨヌく豆草と飼せ。士卒ふ皆腰戰飯と使せて。急ふ人馬を調へけり。却小可ふ敵の雜兵ふうち。雜りく。景春の身邊まで。紛れ入ることをいとりゝべ。嘗てと。具ふ伺ふと。詞ひとく。注進ふ。親兵衛ハさもあらめ。とだゝ。答て。領くのみ。騷ぐ氣色いとりけり。

第百六十八回

二陣を衝突して。靈豬再功を奏す　舊恩を報答して。戍孝前言を全うす

登時。二個の野兵。名ゞ。景春。二ゝび推寄せ。ゝべ。注進を側聞せる。姥雪代四郎以下の衆兵。直塚紀二六。漕地喜勘太。石亀次國太。越鄭三。向水五十三太枝獨鉆素ゑ吉須々利壇五三四的。寄舍五郎等ふ至るまで。皆愕然と目を注ぐ。胸安ふ思ひける。ゝ。ゝ。木大全孝嗣。敢驚く色もなく。徐ふ親兵衛ふ向ひて。ゝ。淺智の論辯助言ふ。似く。憚りるふ。ゝ。敵ふ敗られて再取ふ。猶三千の雄兵あり。自家ハ僅ふ五六百ゑ。而も疲労れ。士卒をりて。怒氣奮ふ。男始ふ倍せる。敵を逆へ。野戰ふ。恐らく勝ち難ふ。誠ふ愚案ふ。ゝ。怒る者ハ誘ひ易ゑ。今奇兵をりて。他と征せば。一戰必勝疑ふ。ゝ。這頭ふ敏系。柱る。冬樹の蔭あり。今在下ふ隊兵と。分ちく。二三百名を授けゆゞ。埋伏して。敵と敗らん。ふの。毛甚麼と。請問へ。親兵衛頭を。歌けて。其策ふ。ゝ。聖王の不從を征ゆゝを思ふ。正路ふ就く。奇兵をりて。せぞ湯の桀を放ち。武王の紂を誅ふ。如ハ王者の軍とのひつべ。然ば後の世とふとゝ。賢君有道の正兵をりく。那乱虐を鎮ふ。方てハ亦當ふかくの如くるべ。我嘗富山ふ在て

○時姫神授與の陣法あり孫子の八門遁甲の陣是なり蜀漢の諸葛武侯よく
あの陣を布設てよく照烈の危窮を救ひ〻那里の俗い是を孔明が八陣とも又
八卦の陣ともいふ其陣法い箇様〻〻と即地ふ畫き孝嗣並ふ頭人等ふ
教示あり〻又いまあふ在る隊の兵を振照俱教二の分ち一者五百名五十三太が
従類六千名二四的須々利の従兵六十餘名都て六百二四十名なるべ〻今是を八
十餘名づ〻八ふ分ち八門を守らしむべ〻這一門毎の隊長い政木生姥雪叟と直塚
須々利二四的五十三太素なる吉と我と八名を足れりとも其進退ハ我這軍扇を
のく指揮せん皆よく我なふ従ふべ〻景春を擒ふもべ〻景春倘あの陣をよく知りく
東方生死門より入りて北方五鬼の死門を突破り又生門より出ふ其開戦
亥角をもむ他知ぎして死門より入らば囊の物を探るが如く必一人も漏もべらず或ハ又
景春あの陣を知ぎとも他も亦然る者なれば其機を査し且疑ふ戰ふぎして退ぐ

只緩やふ是を迂ふべし必急ふ追撃るべらば他我迂ふとの遲ふを見ふ焦燥く
急ふ反し合せそ二七三十一ふ突のく蒐らば胡意輕く戰ふ詭り敗れて走べ却
我五個の野兵と喜勘太郎の伴當い始より是八陣の備ふ曾いく各銃砲城
推乃く這頭ふ故りゐる並松の中枝ふ躲れり登り居て敵の進退を張べ倘我後案の
如く景春八陣を突ぎして反て我詭ふ敗れ走ると迂ふとの処ふ至らば遣り過して
後陣なる敵の馬を撃る仆ね景春是ふ驚ふ慌く退ぐと為る時我急ふ引返して
其乱るゝと攻撃ふば勝ぎとふとあべらば大家あの意を汲よかと言叮寧ふ説示せば
衆兵都て感服して指揮ふ従ふそぶ中ふ孝嗣い殊更ふ親兵衛が宏論智計ふいく
ちもく敬服して かくの如ぎ少年い和漢今昔一人のこ後の世も類あるべらじと感て敵を
俟ふけり介程ふ長尾景春い二ゝび犬江親兵衛と死戰して擒ふせられ其子為景を
こり復さんと思ひ惴れる怒ふ堪ねび亳宅も擬議せぎみづから真先ふ馬を找る左ふ樋口

小二郎維龍あり。右ふ梶原後平二景澄あり直江荘司包道と宇佐美三郎職政も。其後陣を續ける軍兵約三千餘名。天竜掩ふ勢ひを。故の戰場を投ゑ返し。あゑ為景が事あり。一ハ這里へけり。とゆく隨ふ景春ハ馬を駐めそこれを敵いまゞ退くく。一町許前面ふあり。隊長い那犬江るべ。我又推寄来ゆるとゆ知るる狄布儲る陣の光景最奇くゑく。敷ゑ所ゑ所ゑ仆ゑ其為体八方ふ八流の楮幡を建て其下ふ軍兵ヨヌくあり。壁ゑ八箇の陣門ありて開閉時ゑく四方相當り四隅ゑく守ゑ如去。但隱々とて雲霧の其四下ふ起弁ゑく。推包むあゑあゑんとぞ怪ーまる旦京春見ると稍久ーゑあゑ急ふ左右を見ゑ。ゑ景澄維龍ゑふらゑゑ。若们他をゑゑ恵ふゑ我聞唐山古昔の陣法ふ諸葛孔明ゑ八陣あゑゑゑゑあて何ゑゑ我ゑゑゑ学ひゑゑ。ゑゑも其八陣い攻伐ゑ者生門ゑゑゑ入ゑ又生門ゑゑ出ざれい必失ありとゑゑ。那陣這ふゑゑゑるふゑゑゑゑ縦八陣ゑゑゑゑ那八犬の奴们いゑく幻術を紛ふゑゑいゑ今厭

勝の法をゑそ。せゑ漫ふ敷ゑ。他ゑ圏衣景ふ掛らゑゑとゑゑゑゑゑゑ。ゑの故ふ我又憶ふふ今戰ゑーて退ゑ。敵い必隊を乱ーゑ。赶蒐ゑく敷ゑゑゑ其逼ゑゑゑ引受て自家急ふ建更ーて。推包て。拗ゑ。他い小勢ゑ我い大勢ゑ那犬江奴を。擒ふせんと。枝ゑる果実を桃ゑ如けゑ蝋ゑ後陣へ。他へよゑ。自軍春蝋ゑーて。説示せゑ。景澄維龍感俯ーて。隨即包道職政ふ下知を。他へゑ後陣ゑゑ退せゑ引返ゑを親兵備見ゑゑゑゑ笑て。然ゑゑゑそゑれ思ひーゑよゑ。景春果ーて我陣を疑ふゑ是を敷ゑゑ又徒ふ退ゑゑゑ。必我隊を乱ーて赶逼ゑを敷ゑん為ゑゑん。謀計ーゑゑふ皆緩やゑふ赶ふべーとゑ。隊を乱さゑ徐ゑゑと是を赶へゑゑ敢逼ゑらゑ間近ゑゑゑゑゑゑ五十三太素ふ吉。乾児们と。俱ふ罵りゑゑ笑ゑゑ。小石を抓で擲ゑを。景春見ゑゑゑ怒ゑふ沼堪ゑ那奴们我を怕ゑれゑゑゑゑゑ近ゑゑ赶ゑゑ敷ゑゑゑーて。侮り遊ぶ投石二昧。那期ふ至ゑゑゑ疾駈向ゑ。衄ふせん。兵毎返せと過ゑゑ。乗ゑる馬を推旋らーて。鎗挾ゑて敵ふ向ふ景

澄維龍いへらく。惴雄の壯佼哉。近習外様の差別なく。俱に怒に堪ざれば出と嘯て駈向ふを。政木孝嗣向水枝獨鈷須々利二四的其毎も共侶に敵と拄えて且戰ひ胡意敗れて乱れ走れば。親兵衛代四郎紀二六等も獵場の獸の列卒繩を踰ること如に馬に鞭ち。足に信せて逃走るを。景春い猶漏さじと。隊兵を找めて息も艱れぞ。那里までもと鈇ふ程に後より响く敵の銃音。連發てる程。長尾の騎馬武者五六名。斃されて人馬共侶に象棋倒に。ころ〳〵是に驚く諸軍兵將帥士卒並て皆胆を潰り吐嗟と叫びて。譟ぎ乱れて癖れば。後なる敵を見も定めず。潑と頽れて逃走れば。豫期しる大江の隊の兵齊一咄と執て返し。中るに任して斃仆せば。敵いよ〳〵度を失ふて。点滅なく馬に踏れて。果敢なく命を殞もヨヨろ。開ぎ中に樋口小二郎維龍。いらで。主將を延さんと思へば一騎敵に中りて。鎗の尖頭に血を濺ぐ。力戰ふ時程なく。ちを先途と挑まし。政木孝嗣遥に見て。遁敵やと嘆賞し。

鎗挾み走り来て名告かけて刺んと找めば。維龍鎗をもち振りて扱て馬を馳寄遣差へて。一上一下と挑み戰ふ迭の武藝少らぬ優らぬ他雑もせず。死を爭ふ勇悍對応せざるもあれど。維龍い數度の鬪戰に疲労れて眼や眩みけん。孝嗣い内の鎗と拂に違ひて鎧の透を刺串れて馬より墜と落しかど。孝嗣い其首級を捕ぎ。只馬をのみ分捕ぬ。牽駐めつゝ乘りて。猶も敵をぞ鈇ふそるまでの人程に長尾景春い乱れて走る自家の士卒を。林ぬもの共侶に馬の足掻に信せて。脆く也二ゝび敗績ぬ。須々利壇五郎二四的寄舍五郎いる下の野武士十人許と。旗族と鈇蒐ぬ。喚禁め罵辱めて。推捕笞て斃んと競ふを。長尾の近習五六名返合せて防ぎ戰ふ音も劇し。剣戟鎗棒寡なりて衆に敵しかねる。長尾の近習い痍を負ぬもあり。二人い寄舍五壇五郎の鎗に縫れて仆れしかば。景春怒りに堪ずして。馬を馳入れると下を鎗尖鋭りければ。只あの一騎に駈乱されて痛痍に仆ゆ者ヨヨろ

きぞ。寄舎五郎も壇五郎も倶ふ景春ふ中り難く。或ハ肩尖高股を刺まとく殿内坐ふ仰反ら。浩処ふ政木孝嗣蛟雪與保直塚紀二六石亀次國太越卿三重見の士卒四五百名と倶ふ景春を赶蒐まそ走り近づく多勢の敵ふ免れじと思ふ祈直江包道宁佐美職政残兵二百餘名をわく。主将を索ひて返ー多ら推蒐る敵を受禁て入乱れつ戦へば景春ハ今ハ虎口を士卒ふ譲らつ退ぞく馬の端を休る程ふ。梶原後平二景澄も。残兵二十名許をわそ。主を索ひて返ー多ら景春を見て身邊近く馬を馳せ礼を做て詞急迫ぞく諫るやう。思ふも似ざりける。今日の闘戦機を失ふて郎君檎ふ乗りぬ。ー君亦陣歿ぬ。長尾の家ハ断絶せんその義を思ー召されまそ卒ぬ伴仕らんと。ともも詫らぞ鞭をうく。景春ぞ乗る馬の尻を礙と撻ーぞ馬ハ撻まそ蒐直ふ葛西のくまへ走らゆ。後方ふ従ふ梶原景澄残兵毎も共侶ふ皆後れじとそ走る程ふ又赶近つ敵兵あり是則別人ぞ犬江親兵衛仁ぞ向水五十三太と枝獨鉆素ゐ吉其隊の壮佼數十名を従へく連のふ馬を走らまれハ景澄ハ得残兵を留めく敵を防ぎく。是ハ主従僅ふ二騎汗ふる馬ふ鞭ちそ逃るを親兵衛仁と見く他ハ必景春をんと思へば敵の残兵を五十三太ハ何ぞ任せそ這ふ輩を見ぞ馬ふ拍れ敵中へ乗入れつ又馳脱て遥ふ延ぞる二騎の敵を走らまどそ赶蒐る馬ハ名ふ負ふ青海波の駿足ぞれば射る箭の如く一瞬間ふ近づく隨ふ四下ふ响く聲震立く景春返せ仁ぞる。犬江を知まも。蓬ー返せと吸いぞ。鎗を拈く馳ぞる然ーも勇士の威勢ふ中るべうもあらざれど景澄ハ主を殿ませと思ふ心を鬼ふあり。只得馬を乗施らーて矢聲を發ぐ親兵衛と鎗を交へて戦ふ程ふ。景春ハ犬江ぞ本事を既ふ是ぞく知り勝ぞとかーと思ひぞ今景澄ら他と戦ふを不古ぞを見もぞぞ走る馬ふ鞭を中て命を涯ふ落しける。小程ふ梶原後平二景澄ハ犬江親兵衛と戦ふとぞ。腕衰へ鎗法乱れて既ふ危く做り

右時景澄の従父昆弟なる萩野五九郎泰儀と喚ばる壮士も亦景春の往
方を索ねて料らずもこゝに来合はれば今景澄が敵と闘戦の危殆を見て立所に擬
設せる馬を馳寄せ相援けく挾撃するに親兵衛い物とも精神を
加りく右に中り左を拂ふ神出鬼没の嫖姚ふ景澄泰儀驚怕れて倶ふ
引外し馬を退けく鐘を鳴らして逃走らるゝ親兵衛い猶逃さじと心とも
なく自家の衆に離れて迫ふ葛西る冬枯野邊まで赶ふくりける。話分両
頭。その朝犬塚信乃犬飼現八杉倉武者助田税力助等い寄隊の三将
顕定成氏憲房の總軍既に敗績して乱れ走るを赶蒐めつ。葛西る假名
町より半里許這方る。林原の頭に又寄隊の三将と再戦の事の趣い既に前
回に見えたり。然れば信乃們い僅に二三千の小兵なれども地理を揣り切所に据りそゝく
戦へば破られぎる人寄隊の三将い一旦敗軍の残燼なれども猶三萬餘の士卒あれば。

先度の恥を雪んとそ三面齊一競ふのみ。未牌の時候ふるまでも雌雄を分ごぎ
ずして顕定頻りに焦燥て屢軍使を走らせつ。左右の二将に謀り合せて三面一度に
火箭を飛して信乃現八們が竜りる茂林を焼きく欲するに白石重勝及隊
長等ふ。こゝの事を嘗りて士卒に下知して火茅を集め既にあて幾百枝の火箭を
一度に射出さえとする程に今朝より烈しく吹く風に鈍くも火線を吹含まれて其
火反て四下る。枯草に移りて弓なる雑兵們いあて什麼とぞりに驚
慌く倶に其火を撲滅さえとそ或い鎗或い棒を執るに儘せて枯茅萱を撻ば
憶ぎ打出さる茅萱の裏に獣あり。是則別物なれども鄙に牙に蕉火を結着ら
れて戰車を焼して大猪數も減らぎず六十五頭忽焉として前後左右る高萱枯
草踏躙りて顕れ出て雑兵を牙に掛て投飛ばす。弥驚く衆兵隊長主将も
倶に胸を潰して野猪を殺して火を消留よと喚ど叫へど届ぬ下知と怪異に驚く

三百一祠の野猪ハ皆咸暴れ哮りて。又只寄隊の騎馬武者の馬足を并て突
折けバ人馬俯累りて死するもあり。然らぬハ野火に逼られて身を焦して叫ぶもありて。その
信乃現八らハ是を見て歓び勇ざる者なく直元逆友三百一致の隊兵を拔めて攻入
たる中央ハ犬塚信乃並に真間井縦二郎勇士猛卒前後を争ふ勢ひ究破竹の
如く。今日鬩定を輪に做さバ何の時を待んやとて縦横無礙に蹴散せバ然らぞ
も乱れし寄隊の殿兵野猪に驚れ野火に赶れて恥を思ふ雑兵ら皆四零八落ふ。
逃て跡なくなりぬる丹が中に白石城介重勝ハ先鋒の頭人霧布五六とともろく
主君を後安く退陣させんとおもひし殘兵四五十を推團して程よく退く野火を
避て信乃が一隊と血戦を其勇なれあれども寄隊の士卒ハ皆胆落て逃も
あらバ逃まく思ふ網裏なる魚鱉亀に似たれバ敢戦ふ擬勢なく僅に一千許なる犬
塚が隊の兵に皺破られ立脚もなく。事急なるハ敵に加りて反て自家を射なるあ

是バ白石霧生防ぐに甲斐なく。倶に馬を射させ癩を負ひぬバ逃る士卒にうち
雑りて迹を埋めて落亡けり。有恁りし程に寄隊の副将山内五郎憲房ハ。
霊猪と野火の禍鬼に憶きも辟易して二たび總頽になりまくせし折犬飼現八信
道ハ継橋綿四郎喬梁と倶に隊兵を推拔めて突然として衝て入る馬上に鎗頭
向ふに前なく剰野火と野猪に寄隊の士卒ハ防ぐに術なく右往左往乱走るを
這隊の頭人閻蚊野汶八夏盛と喚做も猛者雁馬裂衣八九郎と共侶に馬縴
あな喚返して馬を跳らせ三騎相並て眉尖刀をもて敵をせむる猛勢凄じくり
けまれ敢近つく者なきを現八ハ好敵なりと思へバ継橋喬梁と共侶に馬を
よせ鎗晃めかしてうち向んとする程に汶八八九郎ハ後よりして突めて来る二三頭の野
猪に馬の後脚を蒐られて忽地撞と落しバ能いかにもや思ひけん扁棘を忍び
身を起して逃る雑兵にうち交りて。跡なく影を躲せしバ現八見つつ冷笑ひて

思ふにも似ぬ白徒なりしといへば士卒も喬梁も憶れ哇と笑ひけり。然ば山内憲房は近習僅に五七名を従へて。假名町の方へ落て去く程に。現八を只一騎士卒に先だち赶蒐来つ喚禁め留めて鎗を拈て嚏く蒐れば。憲房の近習們は已を得ず敵を迎へて。各々かはら〳〵振る刃の電光一騎の敵と侮りて倶に勇ましかひもなく皆現八が鎗下に仆るゝも有り倆きもありて。竟に羽翼を喪ひし。憲房は逃るとも他逃さじと覚期の大刀風馬を馳よせ馳違せて。一霎時は挑戦ふものから。原是婦人の手に生育て艱苦を知ざる民情を杳甚だ心驕りて身は柔弱なる貴介公子なりければ犬士の敵するに足る者ならねば持る大刀を打落されて。怯むを現八馬乗よせて搔抓て引着て宙吊にして動かせず四下を佗と見るの折から。継橋綿四郎喬梁は五百個許の士卒を将て馬を走らせて来ければ現八ハヤヤと喚近つきて継橋生ある生口は寄隊の副将にて多く得らず亮賓客なれば暴くなせそ逃すべからず。這か今乗捨たる馬の鞍局に縢着て牽もて去りて。疾郎君の御陣営へまゐらせよといふを喬梁欽び承て馬より下りて士卒と倶に弱り果る憲房を抱えと舁推縮めて件の馬に乗せて。鞨を解て十の字に緊しく縢けて。又故の已が馬にうち乗りて。現八に欽びを述相別れて。牽せて駈て義通君の陣所を投ていそぎける。案下に。此時寄手の一将足利成氏の一隊は。那野火も飛移らば又野猪の怪異もあるかりならば猶直元逸友等と連りに挑戦ふ程に猛可に自家の両隊顕定憲房父子の陣より乱れ謀なく敗績ぬと噂えしかば成氏ら散驚れく則在村と新織素行に件の父子を援けよとて隊兵を分く遣しけり。この故に成氏の士卒減少なりしかば敵のよりよ勢ひを得て攻撃こと甚急く。諍我の士卒は一二の陣の敗軍に氣力折けて數る者勘からず其餘は多く落亡て成氏の旗下に相従ふ近臣股肱の毎なる科草七郎望見一郎是等と宗徒の精兵まで五六百名に過ざりしかば成氏嗟嘆に堪ずして。

大浮堂主人著

霊猪二さびあらわる
神力を見せ
八犬傳九輯卷四十一
文溪堂藏

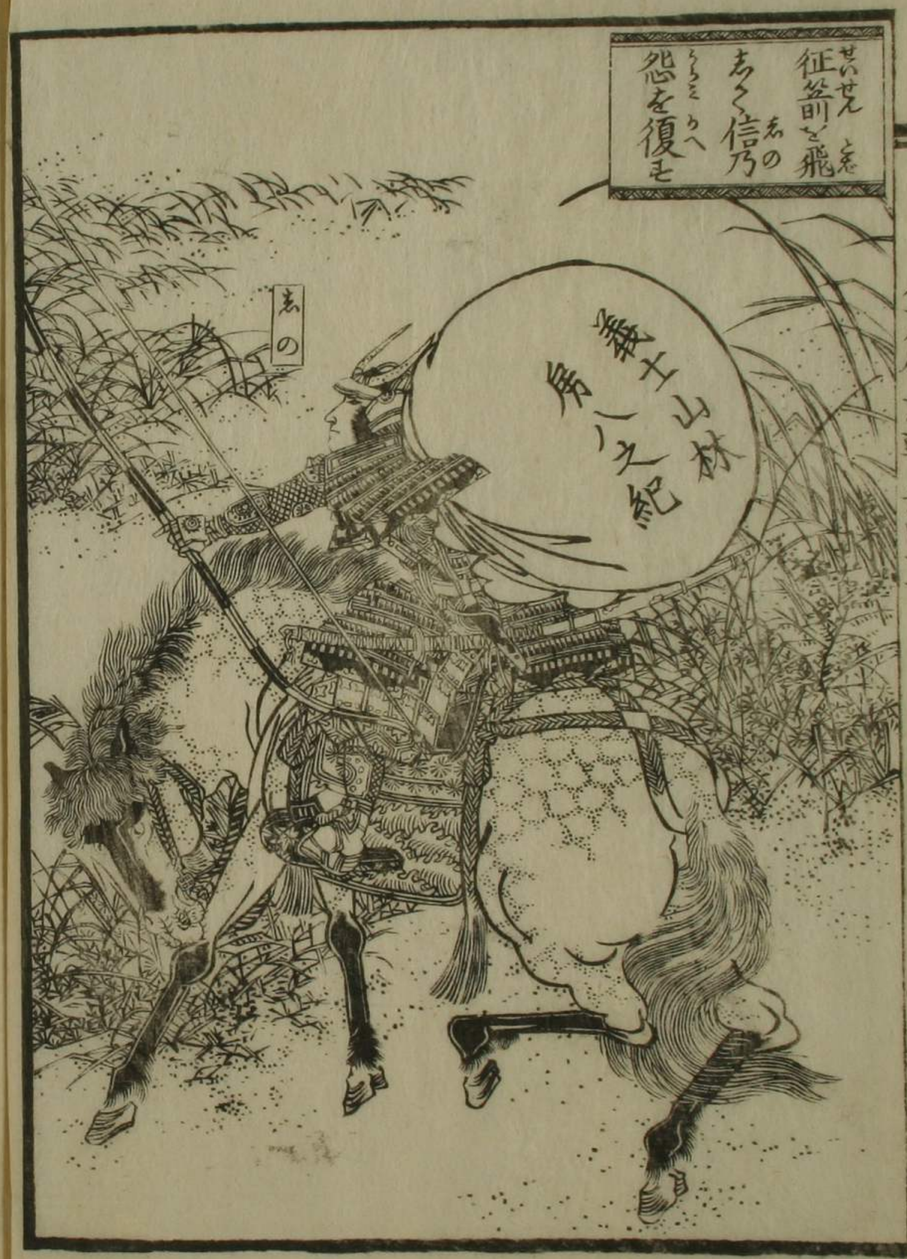
伏姫神霊
八犬傳九輯卷四十一
三十
文溪堂藏

今ハ一も是はそこに戦殺はんと麾うち揮て士卒を找めく敵の隊長杉倉武者助直元の一隊を逆へく推蒐る這時遽し那時凄し颯と降し来る狂風ふ沙石を飛し樹枝を鳴らして天さへ暗くなる隧ふ走りのそ来る一箇の野猪大に怒ると犢ふ奮ふく疾て虎も似くらん狡と思ふ可の猛威りく成氏の乗くる馬を駈仆し主を滾して起んと奉蟲く甲の表帯を牙ふ引掛け背ふ載く往方も知ぬ走ふけり然ば今ふの光景を敵も自家の士卒们も正可ふ見て知る者なければ只狂風ふ驚て怯れて活路とのみ索ばの鬼ご双を交へぎして勝負ハ既ふ決然る直元逸友隊兵を找めく中るふ任せく斫仆せば敵兵ハ早く逃亡て科草望見の黨のみ僅ふ陣殺ふ走ける分程ふ横堀史在村新織帆大丈素彩ハ成氏の軍令ふ従ひて一二の陣の敗軍を援んとそ五六千の隊紅を領ていそぐ程ふ顕定親子ハ戦ひ敗れて今ハ一陣も亦敗軍も逮びけん自家なる士卒の落てゆく後影ヨヌく見えしく在村ハ嘆

口氣して馬を駐め素彩を喚近つけく呼くやう帆大丈和殿いかふ思へる如のこそ我陣も亦敗北の兆見えて我君ハ悉なや陣殺ふ走ぬ狡知ねども左ても右ても元の負を又建復もべくもやうぞ然るを猶恁て在らば必敵の俘ふ為ん。滸我ハ各宅眷あふ疾く去て安危を揣らぶ後悔脈を咬んのみとふ素彩ハ聞く賢慮宜ふその利あり然ば死伴仕ん。と心て躍て間道なる千住の三郷を走く程ふ葛西の底不知野を過る時従ひ来る四五千の士卒ハ又蝕く落亡く才ふ四個の鑣奴のみ今も猶馬前ふ在り在村と素彩ハ倶ふ呆れてうち咳く心細き涯ともなきを迭ふ然る及面色して好々負ぬる那奴们ハ亡て結句優らめとの外ふ術もなく見且も限り遥なる。あの野をさく喻んとく倶ふ馬をそ早めける。有恁程ふ大塚信乃ハ鬱ふ顕定を敷るも果さで走らぬとなる遺恨ふ堪ねば自家の士卒ふ先なりて往方を索れて只一騎迂のそ来る馬の左右ふ従ふ伝

雑兵僅ふ五六名喘々と續けて。折ふし前面を見遣れば。足掻を早めて二騎の落人あり。倶ふ兜を脱捨て。皂裂の頭と裏めて。一個は綿綉の戰袍を。一個は則絳白の段々間道ある戰外套を被て。うち相譚ひつゝ人馬の背。殿五六町西ゆく。信乃いうも相て。熟び堪ず。那錦繡の戰袍を被る落武者は。必是山内の管領。今ぞあらんずるむ。とのゝを従兵うちつれて。知る者あて告るもう不古。他は管領ふひぐ。小可豫相記の。戰袍被る。滸我の權宰横堀史在村之。又戰外套は其次職を。新織帆太夫素彳ふ紛れもあらじ。と思へば信乃又熟び。ゆゝしく亦是我仇ぞ。と。ゆゝしう。も。服ふ殘ず。二枝の表揮の征箭抜出。弓含み直して馬を走らせ。聲高ふ。其里ふ落ゆく。騎馬武者は。滸我の佞臣横堀在村新織帆太夫素彳ふ。我は是大塚信乃。金碗成孝之若们。奸佞邪智の本性。曩ゆ我を虐げ。溺捕ゆく。せのゝるぞ。新織素彳を。緝捕の頭人として。我彳徳の客舎まで。穿鑿ふとの。

急るゝ。ければ。義士山林房八が。我死ふ代り。血深の衣は。縋ふ為りて。我背ふ在り。今。そ復も。舊恩舊怨思ひ知るやと。喚れば。在村素彳うち。敬馬して。馬を駐めて見る。る処を。能弯固めて。漂と射る。矢局差ぎ。素彳は左の耳より。頤まで。貫深く射ら。まて。叫び。果て。馬より。隊て。死。でげ。是ゆゑ。怕る。在村は。項を縮め。泥障を。蹴。馬を。馳て。逃んとする。信乃は。透さず。迂蒐る。馬の足。掻も。弥疾く。弓。勢。箭。接。速る。弦。響と。共ふ。横堀在村は。項の。邊を。丁と。射られて。苦と。叫び。落もせず。日は。鞍。局ふ。俯る。儘ふ。走れる。馬ふ。乗せられて。死活は。知ず。做ふ。又。那四個の。鑣奴は。主よ。り。先ふ。逃亡せ。と。信乃は。二さび。迂まくる。ふ。矢。種。既ふ。盡。ば。只。得。従兵の。續くを。俟て。持せ。鎗を。掻。合。て。若们は。我。の。ゆ。ま。で。權且。這里ふ。居。ふ。かと。のひ。捨。鞭。を。うち。鳴。して。又在村を。迂蒐け。潜。処ふ。犬江親兵衛は。鄙ふ。長尾景春の。隊。長る。梶原後平二景澄と。荻野五九郎泰儀が。親兵衛と。戰ひ。負て。逃るを。連

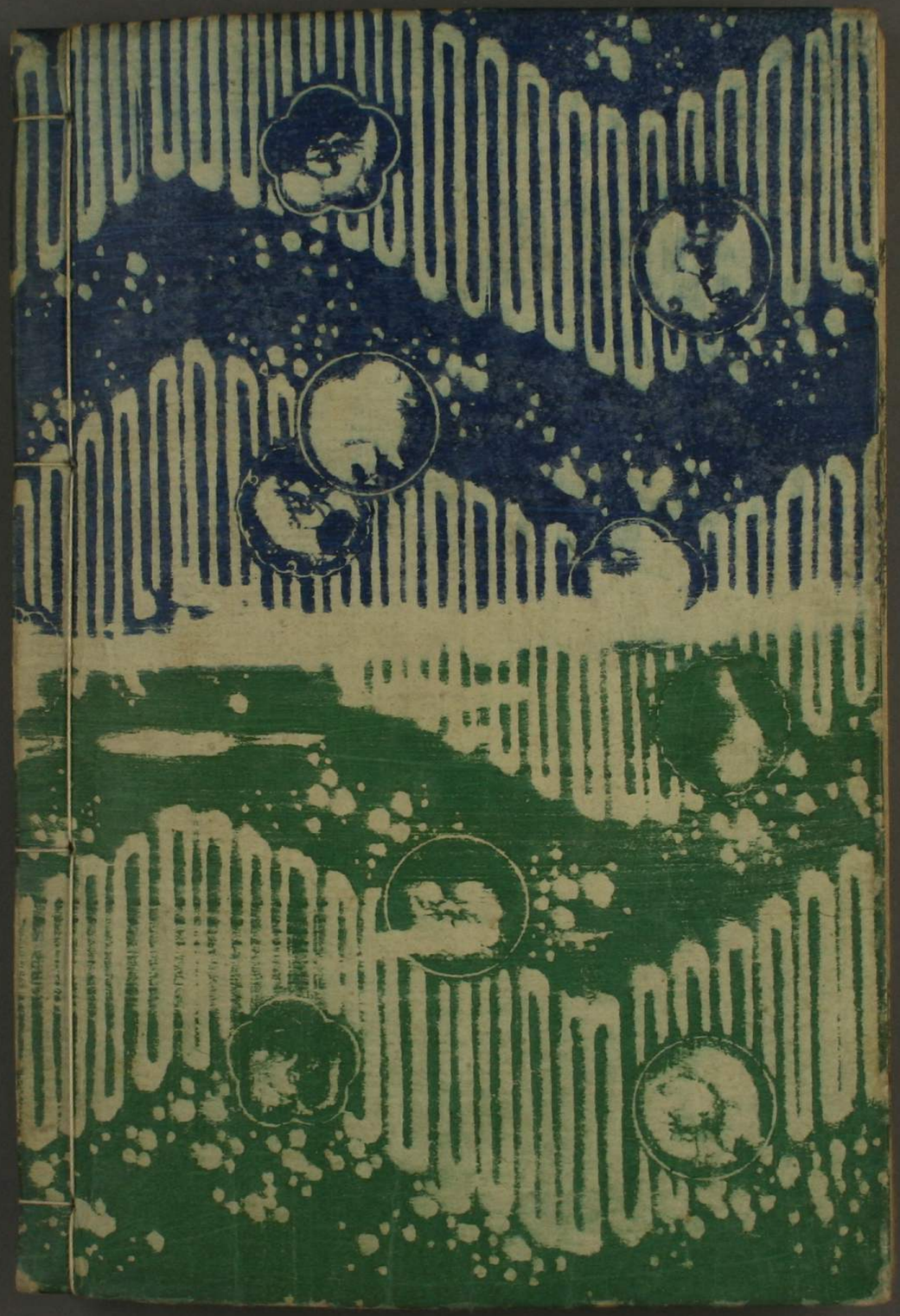

せいせん
征船を飛
志の
志乃
うらみ
怨を復せ
志の
夢十山林
戻一ノ九紀

あの村

アホ迂蒐る勢ひ已とそ沼ざりしかば心ともなく葛西なる底不知野ホ来ホけるに這里ハ茫々たる曠野ゑ茅萱枯芒花弥が上ホ腰曳きて路去りあへぬ地方なれども逃る者ハ路を擇ぶゑ又迂ふ者ハ青海波の駿足ゑ乗れば荊棘延蔓れ野草ゑ物ともせぎ既ホ一ト親兵衛ハ両個の敵ホ近づく隨ホ逢ー返せと喚くけく敏ホ死枯草踏開く馬をのゝく跳らせく後れて馳る景澄の背を鎗ゑ刺すく

る時怪むべーゑの業取の敏ホ死が中ホ最大なる坑あり一ゑ知れば馬蹄を踏ゑ横けん人馬愕然と陷りく在りとも見えぎりしかば景澄是ホ氣力を沼て馬乗返して鎗をとりく刺殺さんと含直ゑ侍る折ふ犬塚信乃ハ猶も横堀在村を迂捕へんとて只管ホ馬を走ゑて疲る程ホ見れば三騎の武者ぞ来る。一騎ハ其両敵を迂ふ者ゆゑの地ホ在るべーとハ思ざりけ犬江親兵衛ホ似ざりしかば且訝り且驚ぶて

それらあらぬ欠とりホ聲を揮へと多時其武者ハ忽焉と業隠る坑中へ人馬ゑ〜く陷りしかば後れて走る一騎の敵突然と返ー来て鎗ゑく坑ゑ向敵を刺殺さんと馬を寄まるゑ信乃ハ吐嗟と馬馳よせてやれ白人なる下ーゑと罵りく鎗ゑ晃めりく刺んと找ぬ景澄ゑち見て仇ハ誰ぞと問せも果ぎ信乃答て仇知ぎや我ハ是犬江親兵衛が義兄弟里見殿の御内ゑ八犬士の一人ゑ犬塚信乃成孝ゑ原来好敵ぞ汝ハ我ハ白井の隊長ゑ梶原後平二景澄是ゑ當の敵ぞ勝負を決せんぎとれと名告ゑ相喚うて鎗ゑ交へく戦ふ程ホ既ゑ迫ホ逃延る荻野五九郎泰儀ハ這光景ゑ見ゑりく只得馬を乗復ーゑ又景澄ホ力を勢せゑ連りホ挑ゑ戰へゑ信乃ハ撓る色もなく左右ホ敵を受ゑりく劇ゑく中る鎗法ホ両敵共ホ腕乱れて引外さんとせー程ホ泰儀ハ項ゑ刺れて馬より仰さまホ墜ーゑく景澄是ホ敬馬怕れて透もあらば逃まく思ホ聊も其便りゑ後反て信乃ホ小髪ゑ刺せゑ赤馬より墜ゑけり登時信乃ハ両個の敵の死活ゑ敢見もくば坑の頭馬ゑ找ゑて聲

高ふ喚るかち。方僅諺て。這坑へ馳り一騎馬武者い犬江親兵衛ぞ。志
以我い犬塚信乃と既ふ和殿の両敵い我鎗尖りく刺滅らへ。我這鎗の幹當ふ
携りて文勇く出より。と告喚被ると両三番やそう鎗と坑中人を繰下さまく做を程ふ怪む
べ一這坑中より起騰る白氣あり。隱々とて煙の如く天ふ冲ると見る程一ゆあらむ又
忽焉と風雷の裏く如ふ音吟えて。颯と吹出た猛風と。共ふ犬江親兵衛い人馬ひとて
く抬出されく。聊も身ふ恙あらむ馬も亦故の儘ゆく。主を無せは端然と坑の
畔ふ立一ぐ。信乃ハ二さび胆を潰一く且呆れ且驚ひふ堪ざり一。眼と定め熟
視く。原来犬江恙ゆりた不思議の面會ゆりけるかな。昔我行德ゆく。和殿の
親の終焉ふ拾言ひ言の葉一ゆ。今日果一ゆ娘一さよと報る言の葉いと
敏系ふ天の段特ふ長やう。れば又巻を易て下の回ふ解分ると聽ねかし。

南總里見八犬傳第九輯巻之四十一終